# 「鏡」と「洞察の力」
## ——*Adam Bede* 論——

宮 崎 隆 義

# 'Mirror' and 'the Art of Vision'
## —— George Eliot's *Adam Bede* ——

Takayoshi MIYAZAKI

**Abstract**

George Eliot started to write *Adam Bede* shortly after completing her first tentative stories compiled as *Scenes of Clerical Life*. The theme of *Adam Bede* is not different from that is manifested in *Scenes of Clerical Life*; the protagonist's aquisition of 'the art of vision' after a good deal of hard experiences. Adam is to aquire it through his ordeals of his father's death and his beloved Hetty's unpardonable guilt. In the process of his aquisition of 'the art of vision', Eliot's imaginary 'mirror', which she as 'a sorcerer' holds for us to show 'the past', enables us to enlarge our vision and to have sympathetic feelings towards others.

Eliot shows us by her 'mirror' the visions of the workshop where Adam works as a carpenter, Adam's home, the Poysers' home, the Donnithornes' home, and the wood. Each of them has in it a discord, which eventually entangles itself with one another to a tragic event of Hetty's guilt in the wood; the orderliness gets gradually lost. Adam, like Adam in the Garden of Eden, hankers for the orderliness, which propensity is manifested in his character; he is severe not only with his father but with others. Eliot reveals the shallowness of his mind through the eyes of several characters. Adam is to dissolve the difference between the appearance and the reality of the mind of those whom he associates with.

In this paper the process of Adam's aquisition of 'the art of vision' is examined in reference with Eliot's 'mirror'.

## I

George Eliotは、連作集 *Scenes of Clerical Life* によって習作の段階を経ながら、その間に構想を暖めていた大作 *Adam Bede* に急ぎばやに取り掛かった[1)]。連作集『牧師館物語』において、われわれ読者は、牧師館にまつわる3つの生活風景を作者エリオットの案内によって、想像力を働かせて心の「目」で眺めるよう意図されている[2)]。そうしてわれわれは、hero でも heroine でもない、われわれと同じ位置にある人間の、他人に対しては閉ざされている悲しみや苦悩の過去を知ることにより同情（smypathy）を呼び覚まされ、感情を基盤とした、同胞の人間に対する共感と連帯へと導かれるのである。エリオットが描こうとした対象は、ごく普通の市井に生きる人間であることに間違いなく、それは、連作集に収められた作品の title をそれぞれ眺めてみたとき、'Reverend' から 'Mr' というように尊称から敬称へ、そして第3作目では 'Mrs' もつかない、ごく親しい first name だけを用いた title となっていることからでも明らかであろう。ここにはおそらく、hero や heroine を描く文学から、真の市民を描く realism の文学への移行というエリオットの意図が込められているように思われる。従って次作である『アダム・ビード』もそのタイトルが、尊称も敬称もつかない名前となっていることは当然ともいえるだろう。

連作集『牧師館物語』が、習作的な作品であると見なされる理由の一つに、彼女の構想の中にあった主題が『牧師館物語』の表題のもとに収め切れなくなったため、より大きな canvas としての novel である『アダム・ビード』に取り掛かり始めたことが挙げられる[3)]。従って『アダム・ビード』の主題が、連作集『牧師館物語』の主題と共通し、発展させられたものであることに異論はない。苦しみや試練を通して他者との精神的連帯や紐帯を得るに至るというエリオットの思想の一端は、主人公アダム・ビードの精神的成長に描かれているのである。

本小論では、アダムの精神的成長の軌跡を辿りながら、エリオットの「鏡」(mirror) に仮託された「洞察の力」（the art of vision）の獲得の過程を考察してみたい。

---

1) "How I Came to Write Fiction", Gordon S. Haight (ed.), *Selections from George Eliot's Letters* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1985), p. 159.

2) 拙論「閉ざされた部屋——George Eliot: *Scenes of Clerical Life* 論考——」『徳島大学教養部紀要（外国語・外国文学）』第2巻、1991年、参照。

3) 'I have a subject in my mind which will not come under the limitations of the title "Clerical Life," and I am inclined to take a large canvas for it, and write a novel.' 1857年9月5日付けの John Blackwood に宛てた手紙、G. S. Haight, *op., cit.*, p. 178.

## II

作者エリオットは自らをエジプトの魔術師に擬して、一滴のインクを鏡の代わりとし、遠い昔の姿、具体的には1799年6月18日の大工棟梁 Jonathan Barge の仕事場を描き出している。

> With a single drop of ink for a mirror, the Egyptian sorcerer undertakes to reveal to any chance comer far-reaching visions of the past. This is what I undertake to do for you, reader. With this drop of ink at the end of my pen I will show you the roomy workshop of Mr Jonathan Burge, carpenter and builder in the village of Hayslope, as it appeared on the eighteenth of June, in the year of our Lord 1799. (p.49)[4)]

連作集『牧師館物語』で明らかになったように、エリオットにとって「過去」(the past) は、他者との精神的連帯や紐帯を持つに至るためには必要不可欠なものであり、T. S. Eliot の言葉を借りれば、いわば「客観的相関物」(objective correlative) ともいえよう。ただ、ここでいう「過去」は、現在に生きる「読者」(reader) のためのものであって、エリオットは、彼女のペン先から描き出される「過去」の姿を読者と共有することによって、そしてその「過去」の世界に生きた人物たちを通して、他者への共感を拡大しようと意図しているのである。その時「過去」は、現在と切り離されたものとしてではなく、現在とつながり現在の中に息づく有機的なものとしての「過去」となる。そしてそれは作品『アダム・ビード』の中の人物たちが持つ「過去」とも有機的につながっているのである。さらにここに持ち出された「鏡」(mirror) の仮託は、彼女のいう「洞察の力」(the art of vision, p. 206) を得るための、目にとっての「窓」(window)、目に映る「視野」(vision) となるものであるといえるだろう。エリオットの考えるリアリズムは『アダム・ビード』の第17章において明確にされているが、それは「私の心の鏡に映るがままに人や物事を忠実に言葉で表したい」(I aspire to give no more than a faithful account of men and things as they have mirrored themselves in my mind, p. 221) というものである。そのためには、身体上の目だけでなく「想像力」(imagination) に支えられた心の目が必要であることはいうまでもないことであるが、その点にこだわるとき、エリオットが描き出す作中の人物も、身体上の目と心の目に映る虚像と実像の乖離

---

4) テキストは The Penguin English Library, *George Eliot: Adam Bede* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1981) を使用。本文中の引用はすべてこれに依る。

と、その解消のプロセスを大きな精神的な荷として背負わされていることがうかがえる。われわれは魔術師となったエリオットの掲げる「鏡」をそばから覗き込み、その「鏡」の中で、さらにまた作中人物の目と心に映る像を眺めるのである。そうしてわれわれは、主人公アダムの精神的発展を通して、われわれの「視野」(vision) を拡大することになるといえるだろう。

上述の引用文において、エリオットは「お見せする」(show) という言葉を使っており、第17章の宣言においては「描写」(account) という言葉を使っているが、彼女の一貫した態度は、Wayne C. Booth が言うところのいわゆる「見せる」(showing) ことに徹したものであるといえるだろう[5)]。従って、作中人物、特にアダムは平坦 (flat) な人間ではなく、いろんな人物の目を通して様々な角度から、立体的 (round) に成長する人間として描かれる。エリオットはさながら法廷の「証人台」(witness-box, p. 221) に立つ証人のように、見たまま聞いたままを述べようとする。従って、主人公であるアダムも、長所ばかりでなく欠点も持ち合わせた人間であることが、他の人物たちの目と口を通して描き出されるのである。

さらにまた物語の至る所に挿入される作者エリオット自身の批評や考えは、この冒頭の部分で明らかにされた、彼女がとっている魔術師の立場を考えれば、至極当然なほどに首肯できるものであり、少なくともこの作品においてはさほど大きな欠点とはなっていない。エリオットがおこなっているのは、われわれ読者にとって客観的相関物としての「過去」を、魔術師として説明を加えながらペンの力によって「見せる」ということなのである[6)]。

エリオットは上述の断りを述べた後に、彼女の「鏡」をアダムたちが働くジョナサン・バージの仕事場に向けている。日常の仕事に従事している人間を描いた点にエリオットの先駆的な功績が認められるとしても[7)]、Adam Bede という名前や、弟の Seth Bede という名前、Dinah、Arthur、Hetty その他いかにも聖書あるいは『失楽園』の世界を偲ばせるような命名ばかりでなく[8)]、大工の仕事という点にも、イエス・キリストの父の仕事を鑑みれば、自ずと聖書の世界がだぶりアレゴリカルな世界が現出され、この作品が寓意性に満ちた作品であ

---

5) Cf. 'Telling and Showing', *The Rhetoric of Fiction* (Chicago & London: The University of Chicago Press, 1983). pp. 3-20.

6) Cf. W. C. Booth, *op., cit.*, pp. 214-5.

7) Cf. 和知誠之助『ジョージ・エリオットの小説』(東京：南雲堂、1980年)、p. 79.

8) Cf. 川本静子『G. エリオット——他者との絆を求めて——』(東京：冬樹社、昭和55年)、p. 89.

ることが容易に察せられる。

仕事場は神聖な労働という営みがなされる場である。その仕事に打ち込むアダムの姿は、キリスト教世界の人間の鏡となる理想の姿といえよう。自分を抑え、厳格すぎるほどの潔癖さときまじめさは、清教主義的なほどの禁欲の側面を多分に見せており、それがこののんびりとした田舎の世界では少し窮屈な融通の利かない面となって現れている。セスのおおらかな手違いをからかう仕事仲間「針金のベン」(Wiry Ben) に対して、力ずくでそのからかいをやめさせる物語冒頭でのアダムの姿は (p. 55)、抑圧的なまでにいわばあるべき秩序を保とうとする理想主義者の姿であるといえるだろう。その点で、彼には楽園エデンの園のアダムの姿がだぶっている。エデンのアダムも、楽園の手入れにより、秩序を保っているのである。

大工という仕事は、肉体を使って材木を加工し、次元の違う形を持ったものを造り出す仕事である。大げさにいえば、イデアの具象化、形象化の作業と見なすことができるだろう。こうした仕事に就いているアダムが、よく言えば理想主義、悪くいえば頑固で偏狭な精神の持ち主と設定されているのも当然なのである。人類の始祖エデンの園のアダムが神によって、その姿を神と同じ理想の姿に造られながらも、実はその認識の力を制限されていたように、この主人公であるアダムも、その姿は見る人をほれぼれとさせるようなものでありながら、内面の認識の力は未だ制限されている。エデンのアダムは、誘惑に負けたイヴによって目を開かされ楽園を追放されるが、堕落したイヴによって彼が知恵を得る点と、主人公アダムがアーサーとの関係により堕落したヘティによって「洞察の力」を得る点とがだぶっているといえるだろう。

作者エリオットは、アダムに鏡を向け、その逞しい理想的ともいえる姿を描き出しながら、同時に彼の内面が融通の利かない偏狭で頑固なものであることを、前述したように多角的にいろんな人の目や口を通して明らかにしてゆく。アダムは、見た目には一際身体の大きい、逞しくて見る者を惚れ惚れとさせるような若者である。

> ...the tallest of the five workmen,... (p. 49)

> Such a voice could only come from a broad chest, and the broad chest belonged to a large-boned muscular man nearly six feet high, with a back so flat and a head so well poised that when he drew himself up to take a more distant survey of his work, he had the air of a soldier standing at ease. The sleeve rolled up above the elbow showed an arm that was likely to win the prize for feats of strength; yet the

long supple hand, with its broad fingertips, looked ready for work of skill. In his tall stalwartness Adam Bede was a Saxon, and justified his name; but the jet-black hair, made the more noticeable by its contrast with the light paper cap, and the keen glance of the dark eyes that shone from under strongly marked, prominent, and mobile eyebrows, indicated a mixture of Celtic blood. The face was large and roughly hewn, and when in repose had no other beauty than such as belongs to an expression of good-humoured honest intelligence. (p. 50)

'... I met as fine a young fellow as ever I saw in my life, ... — a carpenter, a tall broad-shouldered fellow with black hair and black eyes, marching along like a soldier. We want such fellows as he to lick the French.' (p. 61)

しかしながら、見た目に理想的な若者と映るアダムも、実は、他人に対しては例えば弟のセスに比べて冷淡な人間であり、浮浪者も彼には話しかけることはしない。また、母親 Lizbeth からすれば、父親にひどく厳しすぎる人間であり、さらに Mr Casson からすれば思い上がった人間でしかない。

The idle tramps always felt sure they could get a copper from Seth; they scarcely ever spoke to Adam. (p. 50)

'...thee 't so angered wi' thy feyther, more nor wi' anybody else.'(p. 86)

Mr Casson, ..., considered Adam 'rather lifted up and peppery-like:'... (p. 306)

上の引用で「浮浪者」(tramps) という言葉には少し注目しておく必要がある。おそらくアダムの考えでは、浮浪者は労働をおろそかにしたが故に堕落した者であり、考慮すべきどころか、厳しく接すべき相手なのであろう。従ってかつて立派な職人として尊敬もしやさしかった父親[9] の堕落した姿は、アダムにとっては浮浪者と同じであるといってもよい。それゆえ父親に対して、母親リズベスも嘆くほどに厳しく冷たい態度をとるのである。アダムのその厳しさ冷たさは、目に映る姿が虚像であり、目をごまかしうるものであることに、そし

9) "'He war a good feyther to thee afore he took to th' drink. He's a cliver workman, an' taught thee thy trade, remember, an's niver gen me a blow nor so much as an ill word — no, not even in's drink.'", p. 85.

てその虚像の下に、弱さを持った実像が隠れていることに気付いていないからだといえる。

浮浪者のごとくに堕落したアダムの父親は、泥酔のあげくに水死する(Ch.4)。アダムは、父親の死という精神的試練を通して厳しい自己認識を得るのである。

> 'Ah, I was always too hard,' Adam said to himself. 'It's a sore fault in me as I'm so hot and out o' patience with people when they do wrong, and my heart gets shut up against 'em, so as I can't bring myself to forgive 'em. I see clear enough there's more pride nor love in my soul, for I could sooner make a thousand strokes wi' hammer for my father than bring myself to say a kind word to him. ...' (p. 247)

アダムは、複数の他者の目と口を通して、長所も欠点も持ち合わせた普通の人間であることが描かれていたが、ここに至ってアダムは、肉親である父親を「鏡」として自分自身の姿を見つめ、その内面的な欠点に気付くのである。父親の死による精神的試練を受けるまでは、アダムの人を見る見方は、外面だけしか見ようとしない偏狭なものであるといってよい。あらゆる人物が、彼にとっては外面の価値しか持っていないのである。従って、ヘティの美しさは見えても、彼女の内面の冷たさや浅薄さ、虚栄心は見抜くことができない。成人を迎えようとしているアーサーも、彼にとっては、やがて立派な地主となるべき人として見ているだけで、優柔不断で世間体を取り繕おうとする男であることには気がつかないのである。

アダムが働く大工の仕事場は克己の世界であり、人為的な秩序の形成されている世界である。親方ジョナサン・バージを頂点とする階級的秩序ばかりでなく、労働という行為によって、形あるものを観念から作り出すという点についても、秩序を基本とした、望ましいあるべき理想を求める世界なのである。その点で、アダムが従事する大工仕事は、彼の観念の世界を支配している、望ましいあるべき秩序の象徴といえるだろう。仕事場でのふざける仲間に対する態度や、彼の父親に対する態度が厳しく冷たいのも、アダムの、望ましいあるべき秩序を保とうとする精神の現れなのである。

エリオットのかざす「鏡」は、アダムの働く仕事場から、彼の家、ポイザーの農場、ドニソーンの屋敷と、家庭の世界に向けられる。そこに映される像は、父権を頂点とする秩序ある世界であるが、その世界は微妙に乱れを孕んでおり、また一人一人の秘められた個の世界が交錯している。たとえば、アダムの家は、

父親が、かつての大工職人としての矜持を失い飲んだくれのだらしない父親となって、父権を失っているばかりか、アダムの怒りを買っている。ポイザーの家では、ヘティが自分だけの世界に閉じこもっており、ドニソーンの屋敷では、アーサーがヘティとの秘密を持っている。このように、エリオットの「鏡」は、表面上秩序の保たれていると思われる大工の仕事場の世界から、揺らぎ始めている世界、さらに秩序のない混沌とした森の世界へと向けてゆき、最後にアダムとダイナが結ばれることによって、新たな秩序の生み出される世界への移行の暗示をおこなっているのである。

## III

「鏡」は外面を見るためのものであると同時に、内面を見つめるためのもの、内省の象徴でもある。ヘティにとって、寝室に置かれている古いしみの浮き出た立派な鏡は、美しい姿を十分に映し出してくれない、彼女にとっては不満足なものである。同時に、過去というものを切り捨てることができて現在のことしか頭にない彼女にとって、鏡の古さは、無用ということ以外何の意味も持たない。代わりに市で買い求めた安物の手鏡をのぞき込む彼女の姿は、彼女の浅薄な虚栄ばかりでなく、彼女の内面世界の無時間性も表している。

> A queer old looking glass! Hetty got into an ill-temper with it almost every time she dressed. It had been considered a handsome glass in its day, and had probably been bought into the Poyser family a quarter of a century before, .... Even now an auctioneer could say something for it:... ..., it had a brass candle socket on each side, which would give it an aristocratic air to the very last. But Hetty objected to it because it had numerous dim blotches sprinkled over the mirror, which no rubbing would remove, and because, instead of swinging backwards and forwards, it was fixed in an upright position, so that she could only get one good view of her head and neck, .... (p. 194)

この古い鏡が25年前にポイザー一家に買われた価値ある立派なものであることは、ヘティには全く意味のないことであり、そのことに思いを馳せてみることもない。彼女にあるのは現在だけであり、従って彼女に恋しているアダムという男も、彼女には現在のあるがままの姿でしか見えない。

> She saw him as he was—a poor man, with old parents to keep, who would not be able, for a long while to come, to give her even such luxuries as she shared in her uncle's house. (p. 144)

ヘティは、ダイナと対照するように配置されている人物と見なすことができるが、その対照のための共通の基盤として、ヘティもダイナもともに親を幼くして亡くした孤児として設定されている。その上で、ダイナが過去の思い出を大切にしているのに対して[10)]、ヘティはおよそ過去というものを意識することがないのである。また、ヘティが孤児として叔父のポイザー家に引き取られているという事実も、彼女の存在を規定しているといえるだろう。つまり、彼女の存在は、たとえ血のつながりがあるとはいえ、ポイザー一家にとっては、部外者なのである。ポイザーを家父長とする既成の秩序を持った家における、秩序を乱しかねない侵入者と見なすこともできるだろう。

このヘティは、アダムにとって、妻となるべき理想の女として彼の目に映っている。ポイザー夫人のヘティの捉え方を考えてもわかるように[11)]、ヘティは他人のこと、過去のことなど省みない人間である。その点では、Barbara Hardy がアダムについて利己主義者と見なしているように[12)]、ヘティもアダムに劣らず利己主義者といえるだろう。「小さな安物の赤い縁の手鏡」(a small red-framed shilling looking-glass, p. 195) が、その安さと小ささと縁の赤色によって、美しいヘティの浅薄で小さな虚栄を表しているように、アダムにとって、この美しいヘティの存在は、彼女の本質が見抜けない彼自身の浅薄な内面性を映し出すいわば「鏡」となっているといえる。ダイナの高い精神性も、親方ジョナサン・バージがアダムの嫁にと考えている娘 Mary Barge の温和な家

---

10) たとえば、夫を亡くしたアダムの母リズベスを慰めるべく、自分の幼い頃の話をして聞かせる (Chap. 10) ダイナは、過去の経験を通して他人の心を解きほぐす方法を会得している："From her girlhood upwards she had had experience among the sick and the mourning, among minds hardened and shrivelled through poverty and ignorance, and had gained the subtlest perception of the mode in which they could best be touched, and softened into willingness to receive words of spiritual consolation or warning.", p. 158.

11) "... you (Hetty)'re too feather-headed to mind if everybody was dead, so as you could stay up-stairs a-dressing yourself for two hours by the clock.", p. 140, "She's no better than a peacock, as 'ud strut about on the wall and spread its tail when the sun shone if all the folks i' the parish was dying: ...", p. 201.

12) Cf. "Adam, ..., enlarges his imagination and his sensibility. It is egoist's process towards a wider comprehension, and it is George Eliot's version of the tragic sensibility growing through pain...", *The Novels of George Eliot* (London and Dover: The Athlone Press, 1985), pp. 32-3.

庭的な性質も、アダムの目には見えないのである。

アダムにとって、妻となるべき理想の美しい女であるヘティの虚像は、次第に実像として彼に迫ってゆくことになり、その虚像と実像の乖離の解消を大きな精神的な試練としてアダムは受けざるをえなくなる。舞踏会で彼女が落としたロケットに収められていた髪の毛を見て、アダムは彼女に対して疑惑を抱き始める (Chap. 26)。そして彼女とアーサーが「グローブの森」(the Grove) の中でキスをしている場面を目撃してアダムの疑いはピークに達するが (Chap. 27)、ヘティの美しさに囚われている彼の、強い疑いと怒りはむしろアーサーの方に向けられるのである。

アダムの目には、アーサーは将来理想的な地主となる人物として映っていた。

> Towards the young squire this instinctive reverence of Adam's was assisted by boyish memories and personal regard; so you may imagine that he thought far more of Arthur's good qualities, and attached far more value to very slight actions of his, than if they had been the qualities and actions of a common workman like himself. He felt sure it would be a fine day for everybody about Hayslope when the young squire came into the estate—such a generous open-hearted disposition as he had, and an 'uncommon' notion about improvements and repairs, considering he was only just coming of age. (p. 209)

しかし、アダムがグローブの森の中で二人を目撃したことによって、アーサーが、結婚する気もないのに身分が下のヘティを弄んでいるけしからない利己的な男として、アダムの価値観の中で堕落してしまうのである。アダムは身分の違いを無視して彼を責め立てそして怒りのあまりアーサーを殴り倒してしまうが (Chap. 27)、それはある意味では秩序の崩壊でありまた逆転であると見なすことができる。グローブの森は、アーサーとアダムとの関係において既存の秩序、身分の違いが消滅する世界である。その意味では森は、カオスの森であるといえるだろう[13)]。

グローブの森はアーサーとヘティにとってもカオスの森であり、この森の中においては、地主の息子と孤児という関係は消滅してしまう。しかも二人の秘められた関係にとっては、この森は格好の閉ざされた空間となっているのである。その点で、グローブの森は、カオスの森であるばかりでなくエロスの森で

13) Cf. 川崎寿彦『森のイングランド』(東京：平凡社、1987年)、pp. 66-80.

もあり、さらに二人にとっては一種の理想郷ともなっている[14)]。だが、森を一歩出てしまえば、二人には古い価値観と秩序が支配する現実の世界が待ち受けている。アーサーとヘティの不安と恐れはそこにある。アーサーが自分の行為をアーウィン牧師に告白できないのも(Chap. 16)、彼がこの村という共同体の中に将来の地主として生きなければならないからである。その意味では、彼は、村人たちの住む共同体の世界を超越できない人間であり、従って、ヘティの罪に対する責任を感じてその世界から出ていかざるをえなくなる人間なのである。

## IV

父親の死という精神的な試練を経て、自分自身の心の偏狭さを認識したアダムは、さらにヘティがアーサーによって妊娠したことと彼女の嬰児殺しの罪によって、彼の目に映っていたものがいかに虚像であったかを残酷なまでに悟らされる。アダムの父親と同様に、アーサーやヘティも、アダムからすれば、堕落した者たちであるが、その現実の事実を通して、彼らの実像を容易に受け入れられない自己というものを厳しく見つめさせられるのである。その意味では、アダムにとって相手とは、自己を見つめる「鏡」となっているといえるだろう。作中人物たちは、誰もが自分の殻に閉じこもった利己主義者であり[15)]、誰もがそれぞれ自分の意見を持ち相手を評価している。エリオットは他者との関係によって、作中人物たちにそれぞれ自己認識を行わせているのである。いわばエリオットは、いくつもの鏡を作中人物たち相互に向けさせて、その実像と虚像を見せているのだといえるだろう。

ダイナはメソジストの説教師として初めてグリーン広場に立ち、説教を行う(Chap. 2)。そうして説教師を自分の天職と考え、彼女を恋するアダムの弟セスの求愛を穏やかに拒む。彼女がヘティと対照的に強い精神性を表していること、それ故彼女がいわば人々の精神の訓導者であることは明らかであろう。アダムは物語の結末でこのダイナと結婚する。大きな精神的な試練を経たが故に、そのいわばいさおしのように、ダイナという女性を妻として得るといういささか安易ともいえる結末の付け方に疑問は残るが[16)]、他者に共感する力を持っ

14) Cf. 広瀬佳司、『ジョージ・エリオット——悲劇的女性像——』(東京：千城、1989年)、pp. 4-5.

15) 「... *Adam Bede* のほとんどすべての人物はエゴイストである。」、和知誠之助『ジョージ・エリオットの小説』(東京：南雲堂、1980年)、p. 92.

16) 「このようなプロットの展開は、結果が予知されていながら悪を避け得ないところの、人間という弱い存在の悲劇的運命を示そうとする意図と矛盾してはいないだろうか。」、和知、前掲書、p. 87.

た二人の結びつきは、エリオットの考える新たな人間宗教というものを考えれば、手に手を取ってエデンの園を自ら出ていった『失楽園』のアダムとイヴの姿に重なり合うのであり、神無き世界の始祖なのである[17)]。

アダムが大工という仕事によって、イデアを具象化するとすれば、ダイナは、説教師という仕事を通じて、煩悩にまみれる人間を理想のあるべき人間に作り変えようとするのだといえる。この点で、物語最後でのアダムとダイナの結婚が説明されよう。アダムは物質界、ダイナは精神界のアレゴリカルな指導者として秩序を重んじ生み出そうとする存在として登場させられ、アダムは一連の試練を通じて自己認識を経ることにより精神面において豊かさを持つに至る。ダイナは、頑なに閉ざされていたヘティの心を解き開くことによって、説教師としてではなく生身の人間としての自分を見つめ、さらに自分のアダムに対する気持ちを認識するに至るのである。こうして二人はそれぞれ、人間としての可能性を広げることにより、より次元の高い愛を持つに至るといえるだろう。そしてその次元の高い愛が、アダムとダイナを始祖とするこの『アダム・ビード』の世界を規律するものであるといえるかもしれない。

エリオットは、自らを魔術師に仮託して、われわれ読者に、聖書の世界を偲ばせるようなアレゴリーに満ちた世界を提示することにより、われわれにより広い視野を持たせ、そして共感に基づいた他者との精神的紐帯を持つに至ることをこの作品によって意図している。ダイナの精神的成長と発展に多少の不満は残るものの、エリオットの最初の novel としては一応の完成を見ており、ダイナについての不満の部分は、さらに後の小説において発展させられているといえるのかもしれない。

---

17) 「…、エリオットの世界に生きる人々はいわば神なき世界の住人であり、そうした世界において如何に生きるかを模索する最初の人間－それが『アダム・ビード』の主人公なのである」川本、前掲書、p. 90.